

グローバル通信

2019.3 vol.49

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

日ごとに暖かさが増し春めいてきましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

グローバル通信 49号では、修士論文・課題研究を書き終えた院生の感想をはじめ、海外フィールド研究及び実践インターンシップに取り組んだ院生のレポートを掲載しております。また、大学院科目を受講した早期履修生（学部4年生）の感想、地域社会のリーダーによる講演会のレポートなどの内容でお届けいたします。

本号が地域公共人材総合研究プログラムを修了される皆様、また4月よりご入学される皆様にとって、本プログラムの多種多様な取り組み、そして多方面で研究に邁進する院生の様子を知っていただくきっかけとなりましたら幸いです。

なにかと慌ただしい年度末ですが、心身共にリフレッシュして新年度をお迎えください。

「NEW 城陽」の実現に向けて	1
なんどもチャレンジできる社会起業家の育成を目指す	1
修士論文・課題研究を書き終えて	2
2018年度修士論文・課題研究 題目一覧	2
早期履修生の感想／大学院科目を受講して	3
海外フィールド研究レポート・実践インターンシップレポート	3
公開講演会レポート	4
事務局インフォメーション	4



「NEW城陽」の実現に向けて

奥田 敏晴
(城陽市長)

わが国では、出生率の低下などにより2008年をピークに人口が減少する中で、若年層が東京圏に向けて一極集中的に転出する傾向が続いており、地方の高齢化は深刻な状況にあります。

人口減少や高齢化は、税収の減少や社会保障費の増大を招き、自治体に大きな影響を与えるため、各自治体はその対策として観光振興による交流人口の増加と定住化に取り組み、またふるさと納税による税収増を図るなど、自治体間競争が激化し、従来の自治体運営から自治体経営への転換が迫られています。

そのような状況の中でも、本市においては、平成35年度の新名神高速道路の全線開通を控え、高速道路のインターチェンジが設けられることとなり、本市と木津川市を結ぶ新たな道路建設が計画決定されたことや、アウトレットモールの進出が発表されたこと、本市南西部に新たに編入した市街地への企業誘致が概ね完了したこと、(株)ロゴスコポーレーションによる総合アウトドア施設「ロゴスランド」が今夏に開設されることなど、交流人口の増加の礎となる大規模なプロジェクトが着実に進んでいます。

今後は、増加する交流人口を定住化に繋げるため、市の新たな魅力の創出や積極的な情報の発信を行うとともに、若い世代の子育て環境や児童生徒の教育環境を充実し、また防災強化を図るなど、暮らしやすいまちづくりを進めていかなければなりません。暮らしやすいまちづくりの実現は、行政だけでなく、地域での支え合いや助け合いが不可欠であり、地域を担う人材育成を行っていくことが非常に重要な要素となると考えています。

そこで、平成30年8月に龍谷大学と地域人材育成に係る相互協力に関する協定を締結させていただき、学生と職員を相互に受け入れる取り組みをスタートいたしました。

この取り組みによって、地域社会における高度な識見を有する人材が育成され、夢と希望、そして活力に満ち溢れた、新たな城陽「NEW 城陽」の一員となっていただけることを大いに期待しております。

なんどもチャレンジできる社会起業家の育成を目指す



山崎 勲
(NPO 法人シンフォニー代表理事)

今、グローバル化が進む中、かつてない勢いで、あらゆる領域に商品経済が浸透しています。

今や、金で買えないものを探すのは難しいのが現実です。あらゆるものが「金で買える」商品やサービスになっています。個人情報、強大な富を生み出す最大の「ビジネス資源」と言われ、属性だけでなく、行動パターン、趣味、読書傾向、思想まで分析され、「ターゲットマーケティング」の商品として売られています。

昔「揺りかごから墓場」までの福祉政策は、幼児教育から遺品整理まで、ビジネスの対象になっています。

なんでも「金で買える」ということは、なんでも商品にすることが出来、ビジネスにすることが出来ることを意味します。インターネット基盤と商品経済の浸透に中で進む、この自由の拡大により、人々は、誰でも、かつてなく簡単に起業できるようになっています。商品経済があるゆる領域に浸透するほど、格差、DV、子どもの貧困、戦争、飢餓等は「金」をまとった新しい現象となり、同時に、その同じことが、人々に「起業」という選択肢（自由）を拡大することになっています。

人々は、何度でもチャレンジ可能となっているのです。よりよい社会をめざし、起業する道は、いくつになっても、何度失敗しても「選択肢の一つとして」として残されていると言えます。

教育は、このような時代に対応していかなければならないと思います。

NPO 法人シンフォニーは今年、法人設立20周年を迎えます。私たちは、法人設立20周年を機に、際会しているこうした状況に、積極的にコミットしていくつもりです。

貧困、格差、戦争、飢餓、疫病等の課題に取り組む市民活動に、ビジネス的手法を用いる「社会的起業家」の育成に取り組んでいきます。私たちの課題は、団体とその活動フィールド全体を「学びの場」に転化していくことです。これからの10年、20年を見据え、自団体及びその活動フィールド全体を、OJT - OFFJT の「学び場」として再編していく方向で、活動を継続していきます。

修士論文・課題研究を書き終えて



興津 慶 法学研究科修士課程 1年

課題研究を書き終えて

入学後の研究指導で、院試での研究計画書の内容では学术论文を書けないことがわかりました。私の場合は、それからの研究テーマの再設定に多く時間を費やしました。

絶望的な状況ながら、指導教員のお導きの下、政治学の中に興味テーマを位置づけ、リサーチクエスチョンを社会科学の実験アプローチで考察するという研究を論文としてまとめることができました。

研究指導を通して、論文の作法をはじめ、学術研究の厳しさと奥深さを教わりました。毎度夜遅くまでお付き合い下さった濱中先生には、本当に感謝の言葉もありません。これから大学院を目指す方には、研究計画の段階でプロのご助言を得ることをお勧めします。

先生方や院生仲間とのご縁を大切に、今後も特別専攻生として研究活動を続けていきたいと思っております。



山本 広史 経営学研究科修士課程 2年

課題研究を書き終えて

社会人である私は、職務上の能力開発を目的として経営学研究科を志望しました。実務の上で直面する課題は、多面的で複雑です。変化に柔軟に対応し、適切な解決策を導き出すには、論理的思考が必要なビジネススキルであり、大学院での研究を通して鍛えられればと思っていました。修士課程の2年間では、3つの研究科横断型の特別演習や課題研究などによって、実務に役立つ豊富な情報と知識を得ることができたと感じています。

社会人院生の場合、研究に費やすことのできる時間的な制約がありますが、課題研究を実務とリンクさせて考えることができれば、職場が研究の場ともなり得ます。仕事と学業の両立には、その視点が欠かせないと思っています。



佐々木 真由美 政策学研究科修士課程 1年

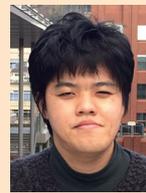
修士論文を書き終えて

書きたいことは最初から決まっていたので、「思う存分、書きたいことを書いてください!」という指導教員からの言葉にとっても励まされ、あがけばあがくほど、ふり返るとワクワクする作業でした。提出後も「もっと良いものになったのでは」という気持ちは残りますが、とにかく無事提出できたときの達成感は味わたったことがないほど大きなものでした。

提出後も「もっと良いものになったのでは」という気持ちは残りますが、とにかく無事提出できたときの達成感は味わたったことがないほど大きなものでした。

先輩へのアドバイス

アンケートやヒアリングなど相手がいる調査は、こちらの予定だけでは進みません。早めに取りかかるとそれだけ、結果の分析にしっかりと時間を確保できます。様式は事前にしっかりと確認しておくこと。せっかく書き上がっているのに条件を満たしていないと受理してもらえません。わたしも提出間際になって要旨がA4で4枚必要ということに気がついたときには青ざめました。ギリギリになるとパニックになってしまいますので、くれぐれもお気をつけあれ。



大山 剛史 政策学研究科修士課程 2年

修士論文を書き終えて

学部の卒業論文から、高等教育の教育費の問題を取り上げてきました。近年では、日本政府が高等教育の教育費の無償化を検討し始めるようになり、ホットな話題になっています。今回の修士論文では、日本政府の無償化政策に対して私なりの評価をしていますが、まだまだ言語化できていない部分もあります。しかし、今回の修士論文で一定の成果を形にできたことは、1つの区切りであると考えています。提出期限ギリギリまで見てくださった指導教員の先生にも感謝しております。修士論文の執筆の経験をもとに、就職しても研究活動ができるように頑張っていきたいと思っております。

修士論文では、修士論文のテーマをしっかりと固めておくことが重要であることを感じました。私は、教育費に関する先行研究を読んでいたのですが、テーマを明確にできず、執筆に苦労しました。また、何事も余裕を持って取り組んでください。1月に入っても執筆作業をしているのは精神的にしんどくなります。

是非、修士論文をこれから書く方々は頑張ってください。

2018年度修士論文・課題研究 題目一覧

No.	氏名	所属研究科	区分	修士論文・課題研究 題目
1	大山 剛史	政策学研究科	修士論文	日本の高等教育の教育費負担の再検討
2	澤井 優太	政策学研究科	修士論文	協働型社会の推進に寄与する自治体職員像
3	永田 紗瑛	政策学研究科	修士論文	新たな森林管理システムが今後の日本の森林に与える影響について～森林経営管理法と森林環境税を中心に考察～
4	原 雄貴	政策学研究科	修士論文	エネルギー自治における市民の役割の課題に関する考察～地域エネルギー事業への市民の関与に着目して～
5	運 動	政策学研究科	修士論文	日本における食品廃棄物の再生利用等の現状と課題～外食産業における食品廃棄物削減を中心に～
6	松原 ルマ ユリ アキスキ	政策学研究科	修士論文	地域社会の母語 / 継承語学習による教育環境整備～在住するブラジルルーツの子ども達の教育事例から～
7	草川 克子	政策学研究科	修士論文	超小規模自治体における地方創生の意義と「ひと」のかかわり方
8	佐々木真由美	政策学研究科	修士論文	公益的活動のゲートとしての子ども食堂の可能性と戦略
9	武村 純一	政策学研究科	修士論文	地方自治体における技術職「電気職・機械職」の地域公共人材としてのあり方について～京都市をモデルケースとして～
10	森津 豊	政策学研究科	修士論文	政策形成過程における若者の参加は自治体にどのような影響を与えるか
11	吉村 裕司	政策学研究科	修士論文	災害初動期における多機関連携の法制度的課題～基礎自治体レベルにおける風水害初動対応に注目して～
12	興津 慶	法学研究科	課題研究	シティズンシップ教育における交渉力・テラシー涵養の有用性～NIMBY 実験による効果測定を通して～
13	丁 豆	経営学研究科	課題研究	インバウンド観光と京都の地域連携 DMO
14	山本 広史	経営学研究科	課題研究	中小企業における潜在的労働力の活用と人材マネジメント～女性のライフイベントに配慮した多様な働き方の構築に向けて～
15	横田 宗也	経営学研究科	課題研究	飲食業における新業態開発～イノベティブ・フュージョンの視角から～
16	浅野 公佑	経営学研究科	課題研究	現代企業における障がい者雇用が抱える問題とその改善のための一考察

早期履修生の感想／大学院科目を受講して



早期履修制度は、大学院に進学を希望する学部生が、4年生時に大学院科目を履修できる機会を提供する制度です。本年度、この制度を活用している学部生3人に大学院科目を受講した感想を聞きました。

筈谷 友紀子 (政策学部 4年生)

私の専攻は都市計画・都市デザインです。しかし、早期履修するにあたっては、あえて自分の専門外の科目を選択しました。

例えば、「地方財政学研究」では租税の正当性について、通説を学びながら議論します。議論においては教員も参加し、数々の有意義な(?)脱線を繰り返し、互いが通説から感じた疑問をやり取りします。この科目の特徴は、毎回必ずもやもやが残るところにあります。

講義後、もやもやについて考えながらいつもよりゆっくと帰る時間を私は大切にしています。この「もやもや」を解き明かすのが、大学院という場であり、研究であるといよいよ感じ始めてきたころです。

田中 友梨 (政策学部 4年生)

私が早期履修で得られたことは、主体的に学ぶ姿勢が重要だということです。大学院の授業は学部の授業とは異なり、学生と教授とが双方向的に学ぶものです。そのため学生側は、自分の意見や考えを述べる機会も多く、私は早期履修の授業を、自分が気になった箇所はどこなのか、それについて自分はどう思うのかなどを気にしながら受けています。そのように、自分の意見や考えを持っていないとおもしろくないのが大学院の授業なのだと、早期履修をはじめてから知りました。

私は今年の春から、大学院進学を予定しています。院進学後も、自分の意見や考えを常に確かめながら、自分の研究をしていきたいと思っています。

和泉 汐里 (政策学部 4年生)

私は大学院進学に向けて、基本であるパソコンの使い方や英語をきちんと学びたいと思い、早期履修制度では「社会調査のための情報処理演習」と「海外調査実践英語演習」を履修しました。海外調査実践英語演習では英語を学ぶだけでなく、学会等で発表する際の準備や心構えについても教わることができ、今後の勉強になりました。院進学の前に履修することができて本当に良かったと思います。

また、授業で院生の方と話をすることで、自身の研究テーマについても深めることができました。院進学後は、自身の研究を進めながら、地域の問題に対して多様な視点から考える思考力を身につけた地域公共人材を目指したいと思っています。

海外フィールド 研究レポート



川井 千敬 政策学研究科修士課程 1年

私は政策学部在籍時から宿泊施設が地域に及ぼす影響と、これをコントロール、マネジメントする仕組みに興味がありました。調べていくと、近年アメリカ西海岸で急速に発展する「Tourism Improvement District」(以下TID)というシステムがあることを知り、ポートランド・シアトルの2都市を訪問しました。

TIDは、ホテルやレストランなど、観光による利益を受ける者から一定金額を徴収し、それを原資に観光プロモーションやマーケティングをするというシステムです。一見すると、観光組合のような組織がプロモーションをするだけのように思いますが、TIDは受益者(ここで言うホテル等)が地域の価値創造のために一部を負担するという「受益者負担」が構築されています。観光の市場がますます拡大する中、観光開発にはTIDのような適切な負担を求める姿勢が重要だと感じました。

「海外フィールド研究」には政策学部青山教授の多大なお力添えを賜りました。ありがとうございました。



ヒアリングの資料作成のために足しげく通ったシアトル中央図書館



シアトルのスカイライン



ポートランドのTID「Travel Portland」オフィスの窓から望むウィラメット川

海外フィールド 研究レポート



原田 麻也子 政策学研究科修士課程 2年

海外フィールド研究として、ベルギーのブリュッセルに2018年9月に訪問しました。交換留学中にブリュッセルを研究対象地として研究することを決めていましたが、実践的な研究や調査を行わずに帰国しました。しかし今回の訪問は、自分の研究目的をしっかりと持った上で滞在していたので、留学中には気づかなかったことの発見もあり、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。

滞在中は店先のテラス席設置における条件や手続きなどについて飲食店を経営されているオーナーの方にお話を伺ったり、EUの代表部に出向でいらしている方にブリュッセルの都市政策について伺ったりと、自分の研究に関する貴重なお話を聞くことが出来ました。これを元に、更に自分の研究を深めたいと思います。



ブリュッセルの街並み



観光名所「グランプラス」



研究内容でもあるテラス席

実践インターン シップレポート

福井 茉奈

政策学研究科修士課程 1年

実践インターンシップで京都府環境部地球温暖化対策課に9月から12月の週2回お世話になりました。インターンシップという受け入れる側も大変ですが、様々な仕事をさせていただきました。主にWE DO KYOTO! ユースサポーターという京都府が委嘱している学生ボランティアに係る業務をしていました。

京都府という環境のイメージが強いですが、実際の現場も職員さんは温暖化対策のために熱意を持って仕事をされていました。何十年後の未来まで考えて仕事をされているところがとってまかつよかったです! 私はもともと環境に興味がありましたが、実際の環境行政の現場で環境について、また自治体職員の仕事を見ることができたことはとても貴重な経験となりました。

地域リーダーシップ研究講演会（12月15日実施）

講師：サンドバーグ 弘 氏（Kiraku Japan 合同会社代表取締役社長）

テーマ：Kiraku による地域の再生

政策学研究科修士課程 1年 吉村 裕司



サンドバーグ弘（こう）氏は、前回講師の金野幸雄氏（一般社団法人ノオト代表理事）と同様、古民家などの物件を高級町屋ホテルなどに再生しておられます。両者の共通点も多いのですが、今回の講演では特に、両者の共通点であった「価値の創造」及び「地元にお金を落とす」視点のほか、特にサンドバーグ氏独自の視点ともいえるべき「データに基づき投資家向けに資料をクレンジングして作成する」ことが強く印象に残りました。

時には泥臭く、手作業でデータを収集、整理し、分析し、見やすくして説得する。この視点は大学院において学ぶ我々、そしてNPOで活動する我々にとっても必要な視点ではないかと強く感じました。

先進的地域政策研究講演会（1月19日実施）

講師：石塚 清香 氏（横浜市経済局 ICT 専任職／総務省地域情報化アドバイザー）

テーマ：データが繋げるまちづくりーハンズオンシティのすすめ

政策学研究科修士課程 2年 金森 祐樹

少子高齢化により行政に限界が来ており、オープンな行政と、市民の積極的な参画による協働が行われるオープンガバナンスが必要とされる。石塚氏はこれに携わり、行政や市民の持つ情報をオープンデータ化してきた。オープンデータとはコンピューターで簡単に加工でき、だれでも自由に使える情報である。

現在、多くの市民がオープンガバナンスに参画し、新たな価値を生み出せるようになった。例えば、石塚氏が手掛けた「育なび.net」は様々な部署の子育て情報をオープンデータ化して集め、自動的に利用者に合う情報が表示される。オープンデータは誰でも始めることができる。講義の最後には、参加者で京都周辺のおすすめスポットを集め、石塚氏によりオープンデータとして加工・公開される予定である。



地域リーダーシップ研究講演会（1月26日実施）

講師：土井 善子 氏（有限会社思風都（シーフード）代表取締役会長／合同会社空思都（ソラシド）代表社員）

テーマ：地域から頼りにされる企業づくりー地域の障がい者との協働の事業展開ー

政策学研究科修士課程 1年 中田 光昭



学生と地域の繋がりから「食」を中心に置いた活動を始め、様々なことにチャレンジなされて非常にアクティブな方だと感じました。食に関しては非常に関心があり、楽しみにしていた講演会でした。私の友達のお母様が昨年から突発性のアレルギーを発症し、平日頃どんな食材や商品にも気を抜くことが出来ずに辛い思いをしている現状を聞いていましたので、アレルギーにも対応可能な場所の存在価値は高いものであると思いました。

また、雇用も積極的に進められており、自然かつ密接したサポートには驚かされました。障がい者なども含め、日本特有の右に倣えの風潮を無くし、個々の能力を発揮しやすい環境を形成していくことがこれからの時代に必要であると考えます。

先進的地域政策研究講演会（1月27日実施）

講師：五十嵐 弘志 氏（NPO 法人マザーハウス理事長）

テーマ：人生を変える出会いの力 元受刑者と社会をつなぐ

政策学研究科修士課程 1年 樋口 育弘

元受刑者という当事者の立場の五十嵐氏は刑務所を出所した人のための自立支援活動を行うためにNPO 法人マザーハウスを設立されました。マザーハウスでは、被拘禁者と社会にいる人々を文通で結び、心と心の触れ合いを通じて、当事者の更生改善等のサポートを行っておられます。また、当事者の声をより多くの市民に伝えるための活動も積極的に行っておられます。

五十嵐氏は、まだまだ当事者の声を社会の人が聴く場所、機会が少ないとおっしゃっていました。元受刑者を排除するのではなく、同じ人間として認め、二度と犯罪を繰り返させないように社会の人が受け入れる仕組みをつくっていくことも、今後の地域社会における重要な課題であると思いました。



事務局インフォメーション

●政策学研究科 海外フィールド研究・修士論文報告会

日時：2019年3月9日（土）10:30～12:30

場所：龍谷大学深草学舎和顔館B103・B104教室

●学位記授与式

日時：2019年3月16日（土）10:30～

場所：龍谷大学深草学舎顕真館

●入学式

日時：2019年4月1日（月）14:30～

場所：龍谷大学深草学舎体育館

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター「グローバル通信」通巻49号 2019年3月

発行／龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム

連絡先／政策学部教務課

TEL：075-645-2285 FAX：075-645-2101

H P／http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/

編集／樋口育弘

編集補助／神野華奈子、太田由記子、山田美由紀

監修／グローバル通信編集委員会

印刷／株式会社 田中プリント